

『山里のごちそう話 ー食・詩・風土再考ー』

谷川俊太郎・内山節・北沢正和 共著（ふきのとう書房）

題名と著者を見て、「面白い本が出たものだ」とまず思った。当誌のぶっくレビューで取り上げるのだから、「山里の話であり、食物の話」ではあるのだが、語っているのが、詩人・山里在住の自然派哲学者・料理人なのである。まさに語っているのであって、対談集である。詩の好きな人、哲学の好きな人、料理や食べ物の好きな人、もちろん、山里の好きな人にもこたえられない本である。

構成がまた面白い。「前口上」が料理人。第一幕が、「食いしん坊の哲学者、大いに語る」（其の一 食再考、其の二 暮らし再考）

続いて、「幕間」が「風土という記憶」（哲学者）。

第二幕が、「詩人と哲学者、自然と美、表現を語る」（其の三 山里再考、其の四 表現再考）続いて「幕間」が「風の弁」（詩人）。

第三幕が、「蕎麦打ち職人、大いに窮する」（其の五 村の文化再考、其の六 生き方再考）となり、農、食、山里、村、文化、風土、時間、人間、人生、表現、果ては山里の女性から見た男性像にいたるまで縦横無尽に語られる。内容はすこぶる多彩かつ詩的哲学的に深く、既成の概念では捕捉困難である。小生のごとき若輩は、ただただあっけにとられて書評はちょっと心もとなくもある。それでも、頑張れば、「詩人、哲学者、料理人が山里をおおいに歌ってくれる」。

詩人は「地面ていうのはもともとどっかいお皿で、上には食べきれぬほどのご馳走がてんこ盛」と言い、哲学者は、「僕の魂は時間がじっくり蓄積された山里に帰りたい」と言い、料理人は、「その大地と時間のなかで、詩人の詩や視点、哲学者の哲学が、自分の一

番のレシピ集だ」と言う。

さらに哲学者は言う、「風土とは、長い自然の時間と人間の時間が蓄積されて生まれた」と。詩人は言う、山里で農をやってくれている人たちが風土を造ってくれて、ほくら都会に住んでいるものは、風になって吹いてくる、何かを運んでくる、と。受けて料理人は言う、山里には行為や時間の蓄積があり、それが豊かな食材になり、自分は、それをいただいて接着材で貼り付けて料理を造る、と。

何かがある。えもいわれぬものが。魂のように大切に、言葉では詩人をもってしても簡単には言えない何かが。山里に。詩人と哲学者と料理人は、それを見つけたのだ。人間にとってどうしても必要な、だからこそ絶対に大切なものを。それでも、少しも興奮せず気取りもせず告げようとしている。山里という場所だからこそできる仕方で。

ゆったりとした場所があり、ゆっくり時間が流れ、人々がまだかかわりを持って生きている。大地のゆたかな恵みがあり、ゆたかな人生が広がる。たとえ、詩人のように都会人であろうと、哲学者のように、山里と都会と半々の生活であろうと、語り合えるのはここだ、人が存在するのはここだ、と思い、死ぬならここしか考えられない、と哲学者に言わせるものが山里にはあるのだ。

「農や食に携わるものが持つえもいわれぬ誇り」がそこには満ち満ちていた。そんな一冊である。たまには、肩のこらないものを読んでみられては。地産地消のスローフード、スローライフのお話。

（2003年2月 1,400円＋税 148頁）

（秋山孝臣）